

空中回廊

第7号

A I C H I
P R E F E C T U R A L
M U S E U M
O F A R T

愛知県美術館友の会 会報

私のこの1点
所蔵作品から
展覧会から

美術館のページ
新収蔵作品から

1
2
3
4

私の行った美術館
飛騨高山美術館
世界のタイル美術館

事務局から

AICHI ARTS CENTER

私のこの1点

愛知県美術館の所蔵作品から

愛知県美術館の所蔵作品と展覧会出品作品のなかから、
会員の皆さんに「私のこの1点」というテーマで、
好きな作品、気になる作品を取り上げ、
ご紹介いただきます。

舟越 桂 《肩で眠る月》

中野 ともみ

何故頭にもう一つの顔があるのだろう。両肩に突き出ているものは何だろう。なぜ正面のほうにある柱だけは不連続で滑らかでないのだろう等々、この作品を見ているといろいろな疑問が湧いてきます。しかし、それをこういうものなのだと納得させてしまうだけの包容力がこの人物にはあると言うのか、彼（彼女？）自体が不思議な暖かい雰囲気包まれているような気がします。

私は正面の顔も好きですが、頭にある、つまり小さいほうの顔に見入ってしまいます。目の向きといい、雰囲気といい、何か高みから見守っていてくれる者を連想させられてしまい、何度も目の高さを変えてまた蠅のようにくるくる場所を変えて観たいと思うのです。

しかし、もしかしたら、近くに来ると木の良い香りが漂ってくると思うのが、この作品を私のお気に入りさせる一番の理由かもしれません。



舟越 桂(1951-)
《肩で眠る月》1996年
88.5×67.0×37.0cm

荒木高子(1921-)《砂の聖書》1983年 14.0×62.3×43.7cm



荒木 高子《砂の聖書》

北川 昌子

昭和20年3月、戦災にあったわが家の焼け跡で、燃えつきた本の灰色の頁に、活字が白く浮かんでいたのを思い出す。《砂の聖書》の作者にもそんな体験があったのだろうか。

砂で作られたかに脆く見えるが、紙状に薄くのばした土に一枚ずつシルクスクリーンで聖書を転写し、それを重ねて本の形にして焼成するという高度な技術とか。

開かれた頁に読みとれる「ST. JOHN」。黙示録であろうか。作られたのは1983年。高度成長に浮かれはじめた頃である。そして現在、わたし達を覆う苛立ちにも似た荒廃感と明日への不安。精神的基盤を聖書にのみ求めるのではないけれど、《砂の聖書》の意図するところはとても重たい。それでいて、耳を澄ませば少しずつ砂をくずしてゆく微かな風の音が聞えてくるような詩的な寂寥感が漂う。

作者はこの他に《原爆の聖書》《黒い聖書》などの〈聖書〉シリーズを制作している。かねてより、この〈聖書〉シリーズの一つ一つに出会えたらと思っていたが、はからずも、三年前デュッセルドルフの陶器博物館で偶然その一つにめぐり会えたのだった。

フランク・ステラ 《リヴァー・オヴ・ボンズ IV》

中島敬子

初めて見た時、アップリケの四角な薔薇を思った。大画面を大中小の正方形で区切った上を不思議な分割法で曲線が走る。部分の境には白線を引き、線の中央を鉛筆の鉛色が正確に走りぬけている。淀みなくためらいもない美しい線に、恵まれたアトリエで豊穡な仕事が出来るという背景が推察される。直線で始まり曲線でこわし、直線に戻り曲線で遊ぶ——人の世の規制と反逆、建前と本音、法と無法を繰り返しながら、それでも黄色の三角は行くべき未来を指し示す。すべての詮索を諦めてじっと凝視する。

主要な色は中心の目型の赤だ。春の新芽の形、新芽の色——次第にすべての色が浮かれ出し、赤はムンムンとしたピンクになり盛り上り口紅が滲んではみ出した巨大なマン・レイの唇の様に呼吸づき始める。びっくりする。この情念を拒絶した端正な絵がふっと姿勢を崩し都会の喧騒や人の生きる哀しみを見せてくれることに。白い輪郭線は廊下のように各色をつなぎ、優しい滲み効果を出すためだったと知る。

あれは96年2月3日、ステラのシンポジウムの為に美術館へ出かけた。本を読みながら行こうと靴をはいたまま、膝行して本箱に手をのばして引き抜いたら、ステラの画集だった。驚きつつ美術館に駆けつけエレベーターに飛び乗った私の後から外国人が二人乗りこん

で頭上でさかんに談笑している。「本当に愉快そうだなあ」と思った途端、「..... sign?」誰かサインして下さいというのか。いぶかしく見上げたら二人の外国人の視線はわたしの胸に抱えた画集へと——。「Really?!」ステラその人だった。画集の中のスナップと同じ赤とブルーのチェックのシャツを着て、学者然とした温厚な紳士。こんなことってあるのだろうか！

彼は私より少し年上。結婚は同じ年だった。彼が名古屋で個展をひらく頃、私は窯を作るべく山に最初の一鉢を入れた。同じ時代に生きていて、ふと触れ合った不思議。本当は立体が好きだった。私の内なる欲望が、出したり見せたりしてはいけないと思っていた欲望が、ステラのうねるアルミニウムの激しさに今にも歩き出しそうな衝動を感じるから。いい子ぶりっ子の自分が困惑し、そしていつか安心するから。



フランク・ステラ(1936-) 《リヴァー・オヴ・ボンズ IV》1969年 308.0×308.0cm



ジョアン・ミロ(1893-1983)
《絵画》1925年 100.0×130.0cm

ジョアン・ミロ《絵画》

宇都宮 多佳子

美術館に一步足を踏み入ると独特のかおりがする。塗料のような、インクのような。「何だろう？」県美独特のかおり。美術館に入った瞬間、このかおりにとまどいながら、不思議と気持ちがひきしまってくる。いつになく背す

じを伸ばして各部屋を覗てまわる。ところが、いつもジョアン・ミロの《絵画》を前にすると今までの緊張感が一瞬のうちに消えてなくなる。やわらかい水色の上に細く描かれたおぼけのような微生物のような不思議な生き物は、ふんわりと浮かんで何ともユーモラスで、観るたびにまわりの雰囲気忘れてしまうくらい楽しい気持ちにさせてくれる。私の大好きな絵です。

.....

展覧会から

佐伯祐三展を見て

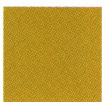
平松 章子

この夏の佐伯祐三展は素晴らしかった。佐伯のとぎすまされた感性が、見る者の心に強く訴えかけ、夭折した作者の心情に思いをはせた。

その中でも私は《煉瓦焼》に魅せられた。よほどこの建物を描きたかったのだろう。心のおもむくまま筆が動いたようだ。煉瓦の色と真中に描かれた白壁が印象的であった。パリの風景画というとは同じく佐伯の《ラコルデール街》のような絵を思い浮かべ、幼い頃からパリの街角の風景として引きずってきていたと思う。《煉瓦焼》を見て、私の中にある佐伯の風景画に一つ新たにこの絵を加えたいと思う。



佐伯 祐三(1898-1928)《煉瓦焼》1928年 60.2×73.1cm 大阪市立近代美術館建設準備室蔵



私の行った美術館

■飛騨高山美術館

白尾 淑子

故郷の大好きなリフレッシュ・スポット、飛騨高山美術館を紹介します。

そこは97年4月にオープンした中身のぎっしりつまった、アート私設発信地です。さくら並木の美しい「すのり川」を渡り、158号線上の飛騨の里に向けて歩く丘の上、街並の向こうに北アルプスの峰々が連なり、最高のランドスケープの中にあります。

色づいた樹々が迎えてくれ、胸いっぱい深呼吸して中に入ります。「アートはトータルなもの」とのオーナーの向井氏のコンセプトに呼応して建物も立派、シンプルで重厚、縦長の窓はアール・デコの芸術と融合して美しい。回廊をめぐる中庭は小石をしきつめた水で満たされ、正に丘の上の別世界。雑事に疲れ、もの造りに行きづまった心をリフレッシュしてくれるところです。

収蔵内容は、ガラスのコレクションで、歴史的に重要な作品を網羅した「16~20世紀のガラスの歴史500年展」とアール・ヌーヴォー、アール・デコのガラスとインテリアの部屋等々。「時間があればハイビジョンシアターで作品の説明をきかされると一層おもしろく鑑賞出来ますよ」と学芸員の上田さんが教えてくれました。2階中央のルネ・ラリックの噴水ホールはすごい。



シャンゼリゼのギャラリー・リドにあった3mものモニュメントがそっくり高山へ!! ゆっくりとエレガントな光を浴びて水の糸はまっすぐ泉へ垂れる。当時をしのばせるアーケード街のポスターがまたいい。戦火をのがれて、無傷でアール・デコの最高傑作がよくぞ高山へ。あるであろういろいろのエピソードを、いつか聞きたいもの。エネルギーで東洋的なガレの曲線より、ラリックや、ウィーン派の作品に私はひかれます。ヨーロッパの人が東洋にひかれ、東洋の私達が西にひかれる、このクロスオーバーがおもしろい。これでもかと息のつまる程の技術の粋は、東洋のやきものにも漆にもあるけれど、ガラスにもあるのだなあと圧倒される。軽い目まいを感じて、明るいマッキントッシュの部屋に来てホッとする。何ておしゃれで、やさしいのでしょうか。端正で、すっきりと主張しているのが好き。私もかくありたいものと下のアートショップでポスターやフレームを求めて、隣のティールームに入る。ここが何ともおしゃれで、落ち着くので(もちろんアールデコ調なのです)。香り高いイングリッシュティーを頂きながら、ゆっくり風のそよぎや、雲を眺め、豊かな時を過ごすのです。それにしてもマッキントッシュと高山の格子は良く合うなと思います。

開館時間：9時から17時

入館料：一般1300円、高大生1000円、小中生800円

所在地：岐阜県高山市上岡本町1-124-1

電話：0577-35-3535

交通：国道41号線・高山方面158号線沿い

ワイドビューひだ・高山駅下車、濃飛バス8分、飛騨高山美術館下車

私の行った美術館

■世界のタイル博物館

森 健次



世界のタイル博物館は、その向かいの「窯のある広場・資料館」、裏にある「とこなめトイレパーク」とでひとつのエリアを形成している。展示室は大きく分けて三つの部分から構成されており、常設展示室が1階と2階に、特別展示室が1階に配置されている。

1階には、トルコ石ブルーのタイル製でイスラム調の大きなアーチがあり、ここをくぐって常設展示室に入ると、タイル文化の伝播ルートを紹介や、タイルの製法についての紹介があり、タイルの原料となる種々の鉱物や、顔料となる化合物などが展示されている。取材に伺ったときには、「2階の展示のほうがメインですよ」と案内されたが、私のようにモノづくりに興味のある者には、こちらもけっこう見物かもしれない。

2階の常設展示室には、紀元前から近代にいたるまでの、世界各地のタイルがコレクションになっており、地域別に展示されている。私のお気に入りにはイギリスのタイルが中

心に展示されている部屋で、実に細部まで手のこんだ手描きのタイル画（写真）や、タイル表面の微妙な凹凸を利用して色の濃淡を繊細に表現した浮き彫りのタイルなどは、見事なものである。

特別展示室では、ヨーロッパの作家らによる、『日本の記憶～欧州セラミックアーティスト達の日本の記憶』展と題し、十数点の作品が展示されていた（12月27日まで）。

向かいの「窯のある広場・資料館」（国の登録有形文化財）は、かつて土管を焼くのに使われた釜とその建屋をそのまま使って、中にテラコッタ（建物の外装に使われる陶製アクセサリ）と染付古便器が展示されている。

また、裏にある「とこなめトイレパーク」は、単なる展示品ではなく、公衆便所として実際に使用する事が出来る。

個人的な感想を言えば、数ある博物館の中でも、かなり个性的ではないかと思うが、ぜひ一度、訪れてみてはいかがだろうか。



開館時間：10時から17時

休館日：毎週月曜日、年末年始、夏期

入館料：一般500円、高大生300円、小中生200円

所在地：愛知県常滑市奥栄町1丁目130

電話：0569-34-8282

交通：名鉄常滑駅より知多バス知多半田行きで常滑東口下車徒歩2分

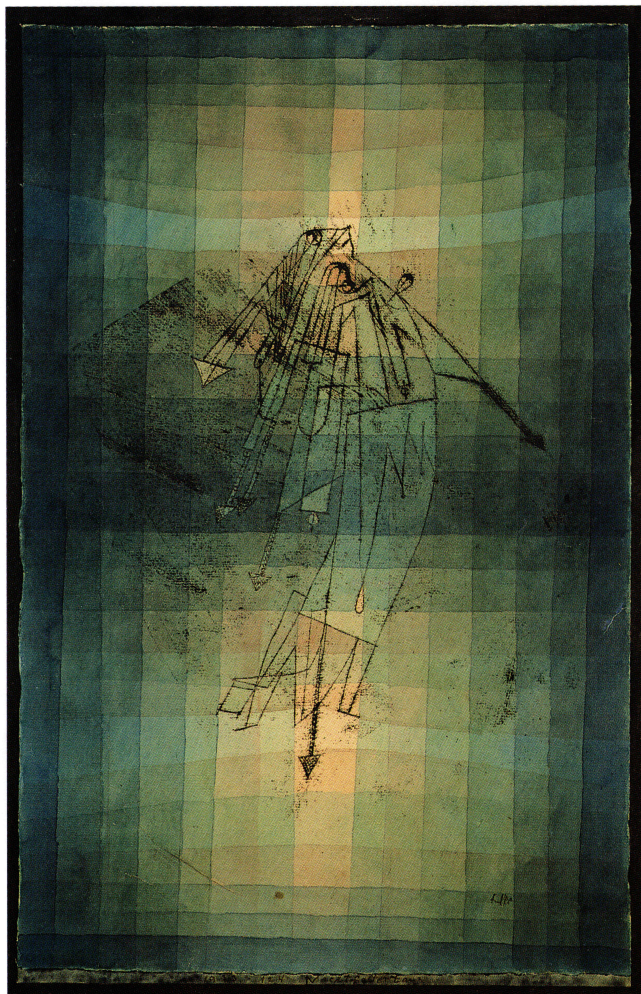
知多半島道路、半田常滑インターまたは半田インターより車で約10分

パウル・クレー《蛾の踊り》

パウル・クレーの画家としての活動を経済的に支援した組織に「クレー協会」があり、その発起人のひとりにオットー・ラルフスという人物がいました。彼はドイツ北東部の都市ブラウンシュヴァイク在住の実業家であり、美術品コレクターとしても有名でした。そのラルフスがクレーと知り合った1923年に初めて買い取った作品は、《へちまと憧れる寺院の壁画》(1922年作、現ニューヨーク、メトロポリタン美術館蔵)、《黄色い鳥のいる風景》(1923年作、現スイス個人蔵)、そして《蛾の踊り》の三点でした。こんにち、そのいずれもがクレーの代表作として有名なものです。

ところで、1930年頃からおよそ十年にわたって銀行員としてドイツに滞在していた和田定夫は、本業とは別に美術品収集にも打ち込んでいました。ヨーロッパ戦争が勃発する前の年にラルフス邸を訪れ、かねてから複数の書籍に原色版で掲載されていた《蛾の踊り》の実物を目の当たりにして感嘆した彼は、その作品を譲り受けたいとラルフスに懇願し、その場で快諾を得たといいます。そうして、その作品は戦乱によって一時的に行方不明になりながらも、遅くとも1950年代の初めには日本に入り、さらに今年度の新収蔵作品として愛知県美術館のコレクションに加わることになりました。

この作品は、クレーが1921年から24年にヴァイマルの国立バウハウスで造形理論に関する教鞭をとりながら、それを自分なりに作品で実践しようとしていた時期に制作されました。当時の彼の作品にしばしば見られる特徴のひとつに「油彩転写素描」という技法があります。黒い油絵具を一面に塗った紙を裏返し、まだ何も描いていない紙の上に載せ、それら二枚の上に原画となる素描を置く。そして、その素描の描線を尖筆でなぞる。その場合、尖筆に加える力に強弱や緩急をつけることで、単に原画と同じ画像が複製されるだけでなく、ささくれ立った線や雲のようにけむった線條が生まれるという技法です。また、クレーは、1921年から23年にかけて、水彩絵具による色の並置や単一色のグラデーションによる「寒と暖」、「静と動」、「色の振子運動」などという概念を実際の作品に反映させていました。さらに、彼は画面に矢印を描き込むことで、物理的な運動はもちろん、むしろそれよりも精神的なエネルギーの動静を表現しようとしていました。



パウル・クレー(1879-1940)《蛾の踊り》1923年 油彩・水彩、紙、厚紙に貼付 51.3×33.4cm

《蛾の踊り》には、バウハウス時代のクレーが試みようとしていたことの多くが、実に見事に凝縮されています。この水彩画の原画としての素描《蛾の踊りのために》(1922年作)は、現在ベルン美術館内のパウル・クレー財団に所蔵されていますが、当館新収蔵の水彩画で「油彩転写」の技法がどれほど高い効果を発揮しているかは、たとえば描かれた蛾の羽の部分と相互に見比べてみると瞭然とします。鱗粉を散らして飛ぼうとする蛾の姿からは、その羽音すら聞えてきそうではありませんか。ベルンにある素描にそうした効果を求めることはできません。転写の際にその効果が生まれることをクレーは充分計算していたわけです。そしてまた、蛾の体肢から何本も発せられている下向きの矢印は、羽ばたく昆虫の上昇力やそれに対する重力、あるいは運動するエネルギーを視覚化しています。

しばしば言われるように、クレーの作品は彼自身がつけ

た詩的なドイツ語の題名とあいまって、表現内容に対するさまざまな解釈を可能にします。むろん、この水彩画も例外ではありません。「蛾の踊り」とは、まず文字どおり、蛾の羽ばたく運動をダンスになぞらえながら写したものに思われます。しかし、ベルンにある素描の段階との最大の違いである水彩絵具による色のグラデーションが、その題名の示唆する内容に広がりを与えています。羽ばたく蛾の姿は、色彩の帯が生む仄かな明かりの中に浮かび上がります。ドイツ語でいう「蛾」、つまり「夜の蝶」とは、それに扮した踊り子を暗示しているのではないか。そういう想像すら許されるでしょう。バウハウスにいたクレーの身近には、さまざまに自由奔放なスタイルの演劇やオペラなどの舞台芸術が展開していたはずです。さらに、踊り子からだから発する矢印は、一種神秘的な光の中で、性的な恍惚へと導かれて行く女性のイメージすら呼び起すのです。

絵画というと油絵具で描かれたものをまず思い浮かべ、水彩画はどちらかと言えば二義的なものであるか習作程度のものだと考える人も少なくないでしょう。しかし、この《蛾の踊り》の放つ水彩画ならではの光彩は、さまざまな材料を用いたパウル・クレーの一万点にも及ぶ全作品の中でも傑出したもののひとつに数え上げられるでしょう。わたくしたちの美術館にはすでに優れた二点の油彩画、《女の館》(1921年作)と《回心した女の墮落》(1939年作)がありますが、それらとともに並ぶとき、《蛾の踊り》の魅力はなおさら際立つものとなるのです。

(寺門臨太郎 愛知県美術館学芸員)

事務局から

編集後記

『空中回廊』第7号をお届けします。今回から、編集スタッフが変わりました。新しい感覚、新しい視点でこれからの会報を作っていこうと思います。

さて、今号の「私の行った美術館」のコーナーでは、取材から記事の編集までをスタッフが担当しました。デザイン、レイアウトもできるところまで自分たちでやってみました。また、前編集スタッフの白尾淑子さんには「飛騨高山美術館」を紹介していただきました。

ぜひ、ご意見・ご感想をお寄せください。新しいアイデアや日ごろ思っていることなど、なんでも結構です。「私のこの一点」のコーナーも引き続き原稿を募集します。会員の皆様の声を集めて、これからの『空中回廊』を作っていこうと思います。(杉山)

もっと楽しい会報に！ ご感想ご意見をお寄せください。

編集

会 員：宮崎玲子、杉山博之、伊藤淳子、中野ともみ、村山るみ、森健次

事務局：村田真宏、寺門臨太郎、小笠原敦子

発 行：1999年1月

愛知県美術館友の会

〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2

TEL 052-971-5511(代)

FAX 052-971-5604

デザイン・レイアウト：小谷恭二

